「生活科における　学び続ける子ども」

「教育」を「教え，育てる」と読むか，「教わることによって，育つ」と読むか？「学習」を「学び，習う」と読むか，「学ばせ，習わせる」と読むのか？「教育」「学習」の主体は誰なのかという論議は常にある。最近は教育における責任と主体性は教師が持つべきであるという主張が優勢であり，学力問題や道徳の教科化等，教育，学校にまつわる言説の中では，子どもは受け身になりやすい。もっともであると感じると同時に，私にとってはどちらでも良いように思える。なぜなら生活科（筆者の専門である図画工作科もそうであるように）において，学ぶべき内容は教師が裁量を持って設定できるとともに，その設定したものが学習者によって変更されても容認できるからである。

本来この表題にある「学び続ける」ことが可能であるならば，「学ぶ内容」と「学び方」は子ども主体でなければならない。教師が先頭に立って導くことによって学び続けることができるというレベルで良いのか，子どもが自主的に学ぶ内容に向かって学び方を学びながら学習を進めることができるレベルのことを言うのか？いや何も知らない子どもに勝手に学びのような活動をさせて，それは「地をはい回る児童中心主義（経験主義）」ではないか。「学び続ける」ことでさえ，主体は子どもにあるのか，「学び続け」させるために教師が主体であるのか課題である。

生活科は身の回りの世界全てが学習材である。それは「もの」であり，「こと」であり，「ひと」でもある。さらには空間であり，時間でもある。「何に興味を持って欲しいか」，「何を学んで欲しいか」を考えるのは教師の役割であるが，そこにどのような「知的な気付き」を見いだすかは学習者である子どもに任される。しかし「地をはい回」らないためには，そこに授業という枠組みと，導入（課題提示），展開（探求），まとめ（考察）という授業デザインを教師は考える必要がある。生活科の授業を構想する際に，こうしたデザインをどこまでおおらかに，そして緻密にできるかによって子どもたちの学びは成立するのではなかろうか。

そして学び続ける子どもを保証するのは教師の力量である。子どもはいつも大人の思いから逃走する。教師の設定した授業の流れから逸脱しようとする。ある年齢，学年に達するとだんだん「教師」＝「大人」の意図を理解し，無理矢理逃げだそうとはしなくなる（大人になると言うことであり，社会化されていくこと）が，身体はここにあっても，意識だけが逃避することはよくある（窓の外をボンヤリと眺める等々）。学び続けるというのは大人の都合ではなく，子どもの論理で学び続けるというのであれば，常に逸脱，逃走，停滞，逆行，迷子を容認しなければならない。果たして現在の学校という制度の中にそのような余裕（ゆとり）が存在するであろうか？私は生活科の中には存在して欲しいと願っているし，今年度の附属小学校での生活科の研究授業はそうした余裕（ゆとり）を想定しながらの授業運営であったと考える。「音」といった目に見えないものを探求するという実践は難しさがありながらも，楽しさがあった。いや難しいからこそ楽しかったのであろう。それは「学習」というものよりも，子どもたちが使用していた言葉「研究」に近いものだった。「研究」はその子の視点により拡散すると同時に，集中していく。

学ぶ内容を理解させる授業研究だけではなく，学ぶ多様性を保証するための授業研究が生活科の中で行われることを期待するとともに，「学び続ける」＝「研究する」子どもを見守りたい。

（共同研究者：初等教育開発講座，川路　澄人）